「神の人」：エブラーヘブライ人名の研究

柴 山^{*} 栄

ABSTRACT Sakae SHIBAYAMA, “*Man of God*”: *So-called Eblaic-Hebrew Personal Name*: Dependent on the previous discussion as seen in *Oriente* 23-2, 1980, the present author also aims to point out the followings: (1) The fact that the type of name Iš + Dn in the Eblaic onomasticon reappears in the Bible does not always mean the cultural continuity between Syria and the Old Testament world. (2) Re-examination of the Old Testament in the Eblaic light directly or through Ugaritic texts would methodologically be destined to repeat errors already committed in the past. (3) Since the Eblaite culture is supposed to be deeply rooted in the Mesopotamians dated between the 27th century BC and the fifth century BC, it should be very careful to study that the Ugaritic personal name *Išb'el* or *Iši-Baal* is intended as a double duty modifier or two way middle, looking back to the Eblaic Iš + DN type name and ahead to the Old Testament personal name *'ešb'el* comparing with *'iš (hā)'elōhīm* as a title representing prophetic office in the books of Samuel, Kings and so on.

I 序

古代オリエントの人名をメソポタミア、シリア、パレスチナ、エジプトの地域よりの出土文書によって、およそ前27世紀のファラ、アブウ・ツァラービークの文書より、前6～5世紀のアラム語メソポタミアにまで遡ってみると、多くのものが同時代に、あるいは時間的距りにおいて、同一、もしくは同一パターンのものであることを発見する。これが何故かということは、そう簡単に答の出せる問題ではないようにみえるが、ひとつはっきりいえる出土文書からの答としては、古代オリエント全域に亘る国際貿易網の存在を、その仲介貿易拠点を通して知ることができ、その活動による文化の伝播を無視することができないということ、もうひとつは、古くからの南メソポタミアからシリア、パレスチナにかけてのセム族牧羊民による居住の展開とその移動の実態を挙げる⁽¹⁾ことができる。そして、これら西セム族牧羊民を総称してアモリ人と称していた

* 日本基督教団調布教会牧師

ものだろう。

人名の研究においては、既に明らかにされているが、民族や言語、信仰を同じくしている者が、同じ人名を有しているとは限らないし、父と子が全く別の系統の名を付されていることがある。⁽²⁾したがって、アモリ人が同じアモリ語人名のみを分布したということにはならないし、またアモリ人の概念そのもの、牧羊部族の多様さをみると単純化はできない。しかし、この牧羊部族が重要な文化的同一性を古代オリエント世界にもたらしたであろうことは軽視できない。⁽³⁾

本論は、旧約聖書で問題にし、解釈に努めている旧約聖書中の人名の一つを⁽⁴⁾あらためて取り上げ、以上の主張を踏まえて理解しなおしてみたいのである。

II 'išba'al と 'iš (hā)'elōhīm

旧約中に73回、26ほどの文脈の中に出てくる 'iš (hā)'elōhīm という言葉は、通常「神の人」man of God と訳されているが、⁽⁵⁾この意味内容については従来しばしば取り上げられてきた。これは主として列王紀に集中して出ていて、エリア、エリシャ、またサムエル記中のサムエルなどの預言者といわれる人々に、そして歴代志、申命記、ヨシュア記、エズラ記ではモーセについて、ネヘミア記ではダビデについて用いられている。これをどう考えたらよいのか、捕囚前とその後ではその概念が変わったのか。あとは無名の者について用いられている言葉だが、ともあれ「神の人」は rō'eh また hōzeh といった類いの、いわゆる占術者とは違った意味での nābī', 即ち、預言者、または預言者とみなされている人々が、神の霊を受けて神の使命を果たす行動をしたとされた時に付された呼び名のようである。一つ一つの場合の意味を、それぞれに検討する必要があるが、この 'iš (hā)'elōhīm は、単に特定の神に属する者、あるいはそれを拝し守護神とする者、また神殿の聖職者という意味での予言者そのものを、旧約では意味していないといえる。

他方、サウル王の子 'ešba'al の名が歴代志上 8 : 33, 9 : 39 に出ている。これはサムエル記下 2—4 章では、サムエルの子 'išbošeth として出ている。もともとは、時間的には旧約の順序とは逆で、後に「恥の人」という名に変えられたのだと、文脈内容からそう推定される。⁽⁶⁾そこで次の問題は、この 'ešba'al を Noth が 'iš + Ba'al であり、「バールの人」の意味の人名であると解して以来、⁽⁷⁾先の 'iš (hā)'elōhīm と比較されるのが常であり、⁽⁸⁾またウガリト文書の出土以来は、išb'al (KTU 4.623 : 8), Išī-Ba'al (PRU III 12.34 : 25) を

比較としてこれに加えるのだが⁽⁹⁾、いったい両者を同じものとしての比較が可能なのか。man + DN の形は同一だとしても、その意味内容は同じものを表わしているのか。またこれを両者とも man of DN の意味に解釈してよいのか。

この 'išba'al については以後オルブライトが³、ウガリト詩文の *iṯ zbl b'el arṣ* を用いて *iṯ* = *iš* であり、“Baal exists” と解するが、⁽¹⁰⁾ アッカド名 *I-ba-(aš)-ši-ilu* (*bašu* + ⁽¹¹⁾*ilu*) と同じタイプのものとして、比較することはできる。しかし、本論の結果からみれば、この解釈は無理である。

他方、ダフッドはこれをウガリト文書中にみる 'šb'el と *Iš-Baal* の両者と比較して、従来からこの *iš* を 'wš (与える) の Pass. Part. の意味、即ち “given by Baal” と解してきたが、最近彼はエブラ文書中に *Iš-abu, Iš-ilum* という *iš* + DN の形の人名を発見するに及んで、従来のヘブライ人名と連動させたウガリト文書人名の解釈をこれに当てはめ、エブラ、ウガリト、旧約の世界との文化的連続関係を明らかにするものの一つとして、これを提示している。

ところで、このダフッドが 'iš (*iš*) を 'wš の Pass. Part. ととること自体に疑問がある。何故なら 'wš は Stative verb ではないし、'wš の Pass. Part. は 'ūš となる筈だからだ。彼は自らヨブ記の 'ōš (gift) は 'wš からきていると解しているではないか。それに 'wš の Perfect は 'āš であり (⁽¹²⁾*Y'hô'āš, Yô'āš*)、いずれにせよ母音は ā, ō, ū であって、ī とはならない。しかし、ダフッドが旧約人名 'šb'el と、エブラ文書の名 *iš* + DN を結びつけて上述の如くに解釈することに対する、直接の反論をまだみない。

本論における問題は、旧約中の 'iš (*hā*)'elōhīm と 'išba'al の意味内容を同じものとしての比較が可能なのかという疑問、つまり直接に歴史的時間と空間の広がりやを考慮の外にして比較が可能なのかということと、もうひとつは、ダフッドの解釈は言語学的に矛盾しているが、仮りにその解釈が正しいとして、いったいエブラ人名 *Iš* + DN の形のもの、ウガリト人名、それに旧約人名の 'šb'el、あるいはこれらと 'iš (*hā*)'elōhīm をいっしょの比較史料となしうるか、ということとともに、この旧約人名の 'išba'al について、ダフッドの如くには解せないことを示すことにある。そこで、まずエブラ文書における *Iš* + DN の形の人名を取り出してみよう。

III エブラ文書における人名タイプ *Iš* + DN

ダフッドは *Iš-a-bù, Iš-i-lum* それに *Iš-la-yà* のみを取り出しているにすぎ

ないが (Dahood, *VTS* 29, 90), このほかに *I-ši-lum*⁽¹³⁾ (TM. 75. G. 1274, r. XIII : 4; TM. 75. G. 2181; TM. 75. G. 2138), *Iš-da-mu* (TM. 75. G. 11148; TM. 76. G. 521, r. V; TM. 75. G. 2238, r. V : 6; TM. 75. G. 1295, v. VIII : 9) をみるが, *Iš-la-ma-lik* (TM. 75. G. 1285; TM. 75. G. 1264, r. III : 4), *Iš-la-da-mu*⁽¹⁴⁾ (TM. 75. G. 1744), *Iš-la-ia* (TM. 75. G. 1833; TM. 76. G. 521, r. I; TM. 75. G. 1264, v. V : 7), *Iš-la-il* (TM. 75. G. 1538) にみる *iš* + *la* + DN の形の *la* は, アモリ人人名でみる *La-wi-la-^aDa-gan* (ARM VII 280 : viii : 17), *La-wi-la-dIM* (ARM VI 51 : 4, IX 6 : 10, 13), *La-wi-la-AN* (ARM VII 112 : 8, VIII 82 : 5), *Su-mu-la-AN* (APNM 223), *Zi-im-ru-la-bi* (A. 3562, III : 7), *A-bu-la-ia* (ARM XIII 10 : 6)⁽¹⁵⁾ 等における *la* と, *Bu-nu-ma-^aIM* (ARM IX 24 : i : 29, 27 : i : 29), *Ha-ab-du-ma-^aDa-gan* (ARM VII 217 : 5) = *Ab-du-ma-^aDa-gan* (ARM VIII 34 : 5) あるいはニップールの *^aMAR.TU-ma-ilu* (Clay, *op. cit.*, 55 a) における Genitive compound name の *-ma* と同様に解してよいだろう。しかし, エブラ文書中には前置詞 “for, to” の意味の *iš*, また, *Iš^{ki}* (TM. 75. G. 1354, r. IX : 6) という地名をみるが, 「人」を意味する *iš* は文中どこにも見出し得ない。

エブラ文書ではシュメールの *^abara.ra* また *^aBARA₁₀-iš* (TM. 75. G. 570; TM. 75. G. 1393; TM. 75. G. 11045) は *Išhara* に当たるが, この *^aIšhara* がエブラ王国のパンテオンに座を占める有力な神であることが判明する。これは古アッカドのテキストでは人名 *Pu₈-^aIš-ha-ra* (MAD 1, 33, v. 3), *Šu-^aIš-ha-ra* (MAD 1, 328, r. 2) として出ているが, キシュのテキストには *^aIš-ha-ra* (MAD 5, 124, 143 : 33), また, Nanâ の讃歌 (K 3933, VIII : 21, E. Reiner, *JNES* 33, 226) に同じものをみる。通常フルリ人の神とみられている (Pettinato, *Ebla, op. cit.*, 272)。そして, マリ文書におけるマリのパンテオンには *^aIš-ha-ra* (ARM XVI/I, 255; AOAT 202, 144,) リマ・タブレットにも同様の神名をみるし (TR 200 : 3), *Haddu-Išhara* 等人名要素に多くみる。ウガリトのパンテオンにも *^aIš-ha-ra* (Ugar. V, 220, 167) の座があり, エジプト第18王朝のシラブル綴りのエジプト語では, *’í-sa-hi-ra* (Albright, *VESO* III : C : 1), ヒッタイトでは医療の女神として *Ishara*, *Ušhara* が出ており, アララクの前18世紀の出土文書にも *^aIš-ha-ra* (AT 3 : 46) をみる。アララクのパンテオンのこの女神については, アスターがセム語

として *iš-ḥara* (*ḥor*, Horus の人) と解したのはエブラ文書出土の10年前で
あつた。⁽¹⁹⁾ いまはこの女神 *Išhara* の名については、文字史料ではエブラ文書の
ものがもっとも古いものといえるが、これをフルリ語としてではなく、*Iš +*
DN の形のセム語と解することは、いまや不可能ではない。⁽²⁰⁾

さて、エブラ文書人名の殆んどはセム語人名であるが、⁽²¹⁾ ファラのセム語人名
Ur-^dE-lum (*Or* 36, 57), ウルⅢテキストにおけるシュメール人名 *Lú-dingir*
(*CST* 263, viii: 2) は、エブラでは *Iš-ì-lum* (TM, 75. G. 1324; TM. 75.
G. 1728) と読まれていたのではないのか。なお、アブウ・ツァラービーク文
書には *Ur-^dNu-muš-da* (*Iraq* 40, 105), *Ur-^dZa-ba₄-ba₄* (*IAS* 65), *Ur-^d*
Dam-ki-na, *Ur-^dÍD*, *Ur-^dNisaba* (*IAS* 35), *Ur-^dEn-líl* (*IAS* 35) をみる。
エブラには *Lú + Dn* の形の人名はみないが *Ur-^dnin-pirig* (TM. 75. G.
1305, r. II: 2), *Ur-ì-a* (TM. 75. G. 1327, r. XII: 10) の *Ur + DN* の形
をみる。古アッカド、ウルⅢテキストにも多く出ているタイプがこの後者で、
例えば、*Ur-I₃-šum* (*OIP* XIV, 48: ii: 7), *Ur-Ma-ma* (*CST* 3, 5), *Ur-^d*
DUB-an (*CT* 32, 8: ii), *Ur-^dEš₄-dar* (*MAD* 1, index) 等をみる。サルゴ
ン時代には、*Ur-^dŠará* (*MAD* 4, AO 11394: 5) の他、*Ur + DN* タイプの
人名は多いが、ウルⅢテキストには、*Ur-^dDumu-zi* (*CBT* 12690: 6), *Ur-^dBa-ú*
(*HLC* II, 101: 6, カッシート期ニップールの *Ur-^dBa-ú*, Clay, op. cit.,
143 a) 等のほかに、*Lú-^dBa-ú* (*CBT* 14709: 11; *MAD* 4, AO 11293: 3),
Lú-^dŠará (*TCL* V, 6058; r. 4), *Lú-^dAš-šir-gi₄* (*MAD* 4, AO 11254: ii: 2),
Lú-^dNanše, *Lú-^dNanna* (*MVN* VI, 492: r. 4, 7) の *Lú + DN* の形のもの
もみる。前18世紀マリ文書には *Lú-^dŠEŠ.KI* (*ARM* II 126: 13, IX 24: iv:
38), *Lú-^dNin-si₄-an-na* (*ARM* IV 22: 14), *Lú-^dDa-gan* (*ARM* IX 253:
II: 25), *Lú-AN* (*ARM* VIII 7: 381), *Lú-^dEN.ZU* (*ARM* V 73: 17), *A-
wi-li-ia* (*ARM* VII 5: 5) をみるが、⁽²²⁾ *Ur + DN* の形の人名はみない。

ウガリト文書のアッカド語テキストには *Ur, Lú + DN* の形の人名はみ
ないが、アマルナ時代のニップールには *Lú + DN* の形の人名を多くみる (Clay,
op. cit., 53 b)。パレスチナでは同時代に *Ur, Lú + DN* の形の人名はみない
が、*Mu-ut-Ba-aḥ-lum* (*EA* 255: 3, 256: 2, 5) をみる。さらに、*APN* は
前2200—606年のアッシリア人名を備えているが、この中に *MULU* (*amēl*) +
DN の形の人名を多数みる。ここでは神名には *Adad, Ašur, Ea, Bēl, Gula,*
Ištar, Marduk (MAR.UD.), *Nabû* (AK), *Sin* (EN.ZU), *Šamaš* (UTU),

Nannari (ŠEŠ.KI), TUR.NUN.NA, Šibarru, Papsukka, *Damu* が用いられ、Ur.^aNIN.IB (APN 243 b) の形の名もみる。

このようにしてみると、シリア、メソポタミアでは、Ur または Lú + DN の形の人名がともに、あるいは交互に Iš + DN の形の人名と同時代またはそれと踵を接してあらわれている。この人名パターンは、いったい “Ur, Lú is DN” を意味するのか “DN の人” を意味する⁽²³⁾のか。AHw や CAD によれば、Ur, Lú は個性的な意味の “人” を表わすが、“所属する者” の原意があるようだ。⁽²⁴⁾Oakk. の DUMU.SAL DINGIR (*mārat ili* は女性聖職者, CAD I, 103 b) は DUMU. SAL. MEŠ DINGIR.MEŠ (Gilg. III: iv: 23), また nin.dingir, dam.dingir (HSS X, 222: iv: 6) と同じものを意味しているだろうが、しかし、DINGIR.MEŠ LUGAL (RA 43, 174: 1) は LUGAL DUMU DINGIR-šú (BIN II, 22: 182)=lugal.e dumu.dingir.ra.na においてみるように、王が個人的に守護神として神を有し、これを拝する神を持っていたことを表わしている。また、LÚ DUMU DINGIR-šú at-ta (“汝は彼の神の子”, CT 17, 33: 16) は, ma-ri DINGIR.MEŠ-šú (CT 17, 3: 14) と同じく、“彼” は王ではない。そして、DINGIR-šú と同じに DINGIR LÚ (KAR 460: 21; AfO 14, 142: 38) 等バビロンのテキストに多くみられるものは, a-wi-lum ša Ištar (VAS 16, 144: 8), i-lu a-wi-lim (YOS X, 25: 19), また il abi (TCL XIX, 468: 10) と同じ形。⁽²⁵⁾即ち、この LÚ が王を指すと否とを問わず、DINGIR-šú=dingir.ra.na と同じく、それぞれの守護神を意味している。人名 I-su DINGIR (MAD 3, 34, Oakk.) “私は神を有している”, ^aDa-mi-iq-ì-lí-šú (BIN VII 63: 30; PBS 8/1 13: 21)=“神 D. は彼の神” 等は、これを表わした名だろう。そして、Ištar DINGIR-šú (CCT 4, 24a: 17, OA) のように、女神を表わすこともある。これは、DINGIR.MEŠ ša a-lí-ša (ARM II 51: 19), DINGIR a-lí-ia (BMS 4, 5: 46), ì-lí KUR (CT 39, 26: 20), DINGIR.MEŠ KUR u KUR-i (TCL III, 315, Sarg.), DINGIR.MEŠ ša Ha-t-ti u DINGIR.MEŠ ša Ha-la-ab (KBo I, 6: r. 9 f), またエブラ文書における dingir Kà-na-na-im (TM. 75. G. 1265, r. III: 4), dingir Kà-na-na (TM. 75. G. 1327, v. VIII: 7), ^abe Kà-na-na-im (TM. 75. G. 1376, v. V: 4), ^abe Du-du-la-a^{k1} (Tuttul, TM. 75. G. 1376, r. V: 9) 等、町、国、地域の守護神を表わすものをみ、そして、^aĀ-da lú A-ba-ti^{k1} (TM. 75. G. 1360, r. XII: 21-22) では lú は神を意味

しているし、この *Iú* は *Abati* に属する者という意味であって、個人的な“人”を表わすものではない。以上のことを合わせ考えてみると人名 *Ur, Lú + DN* は、したがって、“*Ur, Lú is DN*”を意味するよりは、それぞれの神々を守護神としている者（個人的、共同体的に）を意味していると考えられる。“*Lú is DN*”を意味する場合がないわけではないことは、エブラとアブウ・ツァラービークのテキストにおける人名 *AN.MI.MUŠEN* (TM. 75. G. 3439, r. V and v. IX) 及び *AN.MI.MUŠEN-me-ru* (*IAS* 133, 219-pp. 66, 68) = *an-zu* また、*an-zu-^aMe-ru* (J. J. M. Roberts, *The Earliest Semitic Pantheon*, London, 1972, 36; G. Pettinato, *JCS* 31, 116) は “*Anzu is ^aMeru*” (Biggs, *Or* 36, 58, Anm. 5) の意味であり、*Anzu* がメソポタミアの古い神話的鳥を意味するとして (*JCS* 31, 65-116, n. 1), このような “*A* (人, 鳥) *is DN*” の構造を持つ人名が、前27世紀に既にセム族の神をともなっておりあられていることで判明するが、それにしても圧倒的に多いこの古代オリエントにおける上述の神と人との関係を示す概念を表わしたものが、元来の *Ur, Lú + DN* タイプの人名であるといえる。

そして、*DUMU.SAL DINGIR* が女性の聖職者を意味する例をみたが、*DUMU DINGIR* は神殿所属の職業聖職者を意味していないようだ。但し、マリ文書においては、数々の恍惚予言者が神殿所属の聖職者として託宣をのべている書簡をみるが、ここでは同時に民間の市井の者が、神霊を受けて予言活動を行う様をみる。⁽²⁶⁾イスラエルの「神の人」のタイトルを付されている予言者、または予言者とみなされている人々とは、だいぶ違う内容の者として現われている。そして、マリではかれらが「神の人」と呼ばれている事実を、テキスト中から見出すことはできない。

ここで、エブラ文書の次の例をみってみる。例えば、*é-bil lú ^ara-sa-ap* (TM. 75. G. 1292, v. II: 7) における *lú* は何をいみするのだろう。*na-a-ma lugal ir₁₁-ir₁₁* (TM. 75. G. 1339, v. IV: 5) をみると、この *lú* は神殿奴隷ではないだろう。⁽²⁷⁾ また、*pa₄-šeš ^aa-gú* (TM. 75. G. 1365, r. X: 15-16), *pa₄-šeš ^aku-ra* (TM. 75. G. 1274, v. III: 7-8), *pa₄-šeš ^ani-da-kul* (TM. 75. G. 1321, v. VI: 17-18), *pa₄-šeš ^ani-da-bal é-ma-at^{ki}* (TM. 75. G. 1347, v. III: 11-13), *pa₄-šeš ^ara-sa-ap 'à-tá-ni^{ki}* (TM. 75. G. 1264, v. XI: 4-6) にみる *pa₄-šeš* は、この場合、聖職者を意味しているだろう。*pa₄-šeš* の他の例 *pa₄-šeš-pa₄-šeš-sú eb-al^{ki}* (TM. 75. G. 1349, r. XI: 1-2), *en-na-be*

pa₄-šeš giš-ti (TM. 75. G. 1358, v. II : 15-III : 1) 等をみると、行政上あるいは兵の“長”を表わしているかもしれない。そして *Mi-kum-^aku-ra*、即ち pa₄-šeš *ma-lik-tum* (TM. 75. G. 1265, r. II : 1) は dam-en であり、王妃の pa₄-šeš であるが女性である。さらに、*Iš-ru_x-ut nin-ni du-ši-gú* (TM. 75. G. 1325, r. X : 1) 及び *Iš-ru_x-ut pa₄-šeš ^aku-ra* (TM. 75. G. 1362, v. V : 6) における *Iš-ru_x-ut* なる人物が、同一人物だとすれば、pa₄-šeš は女性、男性両方に用いられていることになる。そして、これは直接に聖職者を意味してまい。2 *na-si₁₁ ni-sikil ^aáš-tá-bi₅* (TM. 75. G. 1300, v. IX : 12-13) は、Aštabi 神に仕える者、CAD A/2, 57 ab のいう、それを神として拝する者のことである。(Pettinato, *MEE* 2, 34, 43 も参照)。

エブラ文書における以上を含めた PN lú PN また多くの lú PN (DN) の形の叙述をみると、lú は奴隸ではないが、守護を受ける者である。多くの場合、神殿については é DN の記述はあるのだから、lú DN が神殿に直接関係のあるスタッフ、または聖職者を意味しているとは思えない。前述の Ébil は Rasap 神を己れの神としている者という意味で、*é-bil lú ^ara-sa-ap* と記されている。多くの場合、^abe, ^arasap については、どここの地のという地名が付されている神々であることをみると、いっそうこのことが判然とする。

IV アモリ人人名タイプ Mutu + DN

アモリ人人名には、Lú + DN タイプの人名 Lú-AN (ARM VIII 78 : 38), Lú-^aDa-gan (ARM IX 253 : II : 25), Lú-^aEN.ZU (ARM V 73 : 17) そして *A-wi-li-ia* (ARM VII 5 : 5, VIII 9 : 30), *A-wi-la-an* (A. 3562 : X : 8) をみるが、Ur + DN タイプの人名はみない。しかし、ほかに Mu-ut (a, i, e, u) + DN の形の人名を多くみる。⁽²⁸⁾ OAk. の人名 *Mu-ut-^aINNIN* (RA 9, 34 ii : 7) を、Ištar の“夫”と解してよい (CAD M/2, 314 a) かどうか、この古バビロンのテキストでは疑問である。それは、Ur, Lú + DN の形の人名の時と同様、Mutu + DN の時の神名に男神の方がはるかに多いものをみるからでもある。⁽²⁹⁾ そこで、アモリ人人名では、Ur, Lú + DN タイプの人名に *mutu* を用いているとみることができる。そしてまた、エジプト中、新王国に多くみられる人名 s-n-ḫr (Ranke I, 279 : 13), s-n-ptḫ (同 10) の如くに、s-n-DN タイプの純然たるエジプト語の人名 (Ranke I, 278 : 26-279 : 15) は、明らかに nš-ḫr (Ranke I, 178 : 5), nš-n-imn (同 176 : 18) と区別された“DN

の人”の意味であるが⁽³⁰⁾、しかし、これはメソポタミア、シリアの Ur, Lú + DN タイプの人名と無関係に存在するようになった人名であろうか。前19, 18 世紀のエジプトのアジア人人名（セム語人名）等⁽³¹⁾をみるまでもなく、セム語及びセム語人名タイプを取り入れたヒエログリフ・エジプト語人名は他に多くみられる(Ranke II, 249-250, esp. 252 f)。

V ウガリト文書人名

ウガリト文書には、アルファベット、シラブル綴り両方の *mtb^{el}* (KTU 4.130 : 10), *Mu-ut-^aba^{el}* (PRU IV 17.122 : 6, PRU III 16.155 : 6), *Mu-ut-ta-a* (PRU IV 18.20 : R: 10') の Mut + DN の形の人名をみるが、ウガリトでは詩文中の *mt rpi* (KTU 1.19 : I : 47)⁽³²⁾, *mt hrnmy* (KTU 1.19 : I : 37) にみる“DN の人”の形の形容語では、“人”に *mt* (*mutu*) を用いている。ウガリト文書では、個人的“人”を意味する言葉としては、*iš* を用いず、*mt* (*mutu*) を用いていることが全文書についていえる。ウガリト語の *inš* は、ヘブライ語の *'nš* に当り、アッカド語の *nišu* と比較されるのが常だが、人名には用いられていないが、かなりの例（使用）を詩文中にみる⁽³³⁾。しかし、*inš ilm* がウガリトでは“神（々）の人”を意味しないことは明らかである⁽³⁴⁾。即ち、ウガリト王国では、“人”を意味する *iš* に対しては *mt* (*mutu*) が用いられていたことを示すものだろう。とすれば、*mtb^{el}*, *Mutu-^aBaal* の人名は、外国人がそのままの名をウガリト王国に持ってきたものではなく、Ur, Lú + DN 等のメソポタミア、あるいはシリアの伝統的人名タイプを、ウガリト流にウガリト化して用いたものか、それともアモリ人によるものか。上述のウガリト人名 *bn išb^{el}* (KTU 4.359 : 8, 4.617 : II : 35), *I-šⁱ-^aBa^{al}* (PRU III 12.34 : 25) は、戦車(兵車)乗戦士階級の者 (*maryannu*) の名であること、またアララク王国の前15世紀出土文書には *Iš-ia* (AT 129 : 4, 298 : 34) の人名をみ、ウガリト文化におけるフルリ人（語）の位置を考えると、この2つの人名 *Išb^{el}*, *Išⁱ-Ba^{al}* は、もともとウガリト人名にはないものであったかもしれないことは考えられる。しかし、このほかに、先にエブラ文書人名でみたように、*iš + la + DN* のタイプの人名 *Iš-la-Ma-na* (PRU 16.257 : III : 53) をみると、外国人とばかりはいいきれない⁽³⁶⁾。

VI 前6—5世紀メソポタミアのアラム語人名

まず、前560年のバビロンの戦士の人名 *Iši*-⁽³⁷⁾KUR.GAL を中心にして考察してみる。この ⁽³⁸⁾KUR.GAL は、アラム語では MAR.TU = *Amurru* を表わすことは、ザドク (Zadok) の集めた人名の中に多くみる例により明らかだが、ここには「⁽³⁸⁾KUR.GAL + 動詞, 名詞」の形の人名がみられ、動詞 (名詞) に用いられているものは *-i-da-* (*yd^c*), *-ša-ma-* (*šmy*), *-na-ta-nu* (*ntn*), *-ra-ka-šu* (*rkš*), *-ra-ḫa-qu*, *-se-em-ki-*, *-si-im-ki-* (*smk*), *-za-ba-du* (*šbd*), *-id-ri-i* (*dr*), *-na-ša-ba* (*nšb*) 等すべて西セム語であり、ヘブライ語、アラム語の中に見出すことのできるものである。中でもアラム語のみに見出されるものが多い。*našaba* の如くに、古バビロンにおけるアモリ人人名 *Yaššib-Dagan* (ARM XVI/I, 232) において用いられているものもみる。また、カッシート時代のニップールには ⁽³⁹⁾KUR-*aḫ-iddina*, ⁽³⁹⁾KUR.GAL-*ēriš*, ⁽³⁹⁾MAR.TU-*ma-ilu* (AN), ⁽³⁹⁾KUR-*na-ši-ir* 等, *Amurru* を第一要素とし、セム語をともなった人名を多くみる (Clay, *op. cit.*, 54-55)。このうち、⁽³⁹⁾KUR-*na-ši-ir* はマリ文書で ⁽³⁹⁾MAR.TU-*na-šir* として出ているが (ARM XIII I col. XI : 3'), この DN + *našir* の形の人名はアモリ人人名の一つの典型である。*iš* (*i*) についていえば、現実には用いられていたアラム語 *'yš*, *'š* には、個人を表わす“人”を意味するものはないわけではなく (KAI 202, A : 2 等), 人一般とか, *someone*, *noman* *anyone* を表わす時に用いられるもののみではない。むしろ、ここには Ur-⁽³⁹⁾Nannar (H. Stigers, JCS 28, 20, 7-6 cent. B.C.) の名をみることを加えておかねばならない。

そこで、*Iši*-⁽³⁹⁾KUR.GAL の *iši* は、アッカド語の *našû* の命令形または、Preterit の *iši* あるいは *išši* ととらない方がよい。⁽⁴⁰⁾ また、アケメネス朝下の5人の漁夫名の中に (PBS 2/1, 208 from 25. VI. 419/18 B.C.), *Ṭāb* (DN₁₀.GA)-*ša-lam* の子 *I-ši-ia* の名をみるが、*Iši*- の人名は前一千年紀のメソポタミアでは、ここに挙げた2例のみしか現われていない。これを (*y*)*išī*, (*y*)*išay* (IPN 38, 138, 249) とヘブライ語として解することは、2例を合わせ考える時に困難があり、これを *Iši* + *ia* (神名の *hypocoristic*) として、先のエブラ人名 *Iš-la-ia*, ウガリト人名の *Iši*-DN (Baal), アララク前15世紀人名 *I-ši-ia* と比較した方がよいことは明らかだ。この人名は、前6世紀バビロンにおけるアラム語名であり、こうしてみると、Ur, *Lú* + DN (*Mutu* + DN) タイプのシュメール、アッカド、アモリ人また北西セム語人名のアラム

語読みを、楔形文字で表わしたもので、さらにアケメネス朝バビロンにおける *I-ši-ia* (R. Zadok, *The Jews in Babylon during the chaldean and Achaemenian Periods*, Haifa, 1979, 27, 28, 75) をみると、シリア、メソポタミアの人名のうちの伝統的タイプのものである。

但し、これは前 8 世紀以降しきりにメソポタミア、特に南メソポタミアへ侵入し来たとされるアラム人によるものか、それとも前 8 世紀以前から都市部以外の地域で居住してきたアモリ人、あるいはセム族牧羊部族によって保持されていたものかは分らない。

アラム人もしくはアラム語が、アモリ人及びアモリ語を祖とするという説は未だ確証されているわけではないが、アブウ・ツェラービーク文書の *En-na-il* (AbS T 192, 274, 282, 344) は、エブラ文書でも、*En-na-il* (TM. 75. G. 1336, r. II : 3 では彼は *ugula lum-na-an^{ki}*) という *En-na* + DN タイプの人名は多く、OAkk. テキストにもこのタイプの人名は多く (*MAD* 3, 52f), 古バビロンでは *Ha-an-na* + DN, *Ha-an-ni* + DN (*ARM* XVI / I, 101-2), ウガリト人名における *ḥny* (*KTU* 4.170 : 17), *ḥnyn* (*KTU* 4.281 : 18), *ḥnn* (*KTU* 4.611 : I; 18), *Ḥa-na(-an)-nu* (*PRU* III 16.294 : 1; 同 III 16.138 : 7), *Ḥa-an-ya* (*PRU* III 16.208 : RS-4'), そして、新バビロンでは *Ḥa-nin-^aE-si'-*, *Ḥa-ni-ni* (Zadok, *op. cit.*, 371 b) というこれら同じ形のもの(41)をみると、たとえば、ヘブライ人名 *Ḥananyāh* (エレミヤ書 28 : 1, 5), *Ḥanānī* (列王紀 上 16 : 1, 7), 望楼名 *ḥanān'el* (ネヘミヤ記 3 : 1) をみて、あたかもこれらはウガリト人名とのみ関係あるかの如き比較作業を行うことは、間違いですらある。即ち、ヘブライはウガリトから「借りた」とはいいい切れないからである。

またエブラ神名 *Aš-tár* (TM. 75. G. 1441; TM. 75. G. 1337; TM. 75. G. 1417; TM. 75. G. 1349, r. XI : 17; TM. 75. G. 1376. r. V : 3) は、アモリ人によって *At-ta-r(i)* (*ARM* I 163 : 17) と表わされ、ウガリトでは *ʿttr* (*KTU* 1.24 : 28, *KTU* 1.2 : 12) として詩文中に、*ʿttrab* (*KTU* 4.232 : 12), *ʿttry* (*KTU* 4.93 : I : 4) が人名として出ており、アラム人は *A-tar-* あるいは *A-tar-* として新アッシリア、新バビロン時代の人名に用い (Zadok, *op. cit.*, 359-360), 同時代ペルセポリスの *At-d(a)-ir-nu-ri-iš* (*PF* 1799 : 4-5, *Acta Antiqua* 25, 108), *Aš-tar-ḥu-a-* [*K* 8434 : V : 14] の人名, Sefire 碑文では *ʿtr* (I A 1, 3, 14), そして、メソポタミアではこの神は *Ištar*⁽⁴²⁾, へ

ブライでは *Aštarot* と女性形で表わしている。これらにより、アラム人は *At(t)ar* をメソポタミア侵入後、アッカド文化から得たものというより、遙かに遡る時代に、シリア、またはアモリ人文化より得たものではないかと思える。

前7世紀のアラド(死海西)より出土のアラム語碑文中の人名 *'šyhw* の第一要素を、リピンスキは *āš* と読んで、やはり *'wš* の Perfect の形に訳しているが、⁽⁴³⁾彼はおそらく、ヘブライ人名 *Yō'āš*, *Y'hō'āš* と比べている。しかし、*'šyhw* とこれらとを比較することは、余程のことがない限り不可能である。⁽⁴⁴⁾古代オリエントの人名においては、特に西セム語名では、第一要素と第二要素から成る動詞と神名の順序が、逆になって現われることはまず無い。例えばアモリ人人名 *Išhi-Lim*, *Išme-Dagan* が *Lim-išhi*, *Dagan-išme* となって出ている例はない。そこで、*'šyhw* と *Y'hō'āš*, *Yō'āš* を比べて、この *'š* と *'āš* を同じものとして *'āš* (perfect) の意味に解して読むことは、人名の納得できる説明とはならない。⁽⁴⁵⁾

したがって、アラム語碑文中の上述の *'šyhw* も、アラド出土のヘブライ文字印章の *'šyhw* 及びラキシユのヘブライ文字印章の同じ *'šyhw* と同様、⁽⁴⁶⁾やはりメソポタミア、シリアに伝統的な人名パターンのアラム語版、ヘブライ語版であろう。そして、歴代志における *'šba'el* もこの人名タイプにしたがったものであり、“man of Baal”の意味で、“given by Baal”ではない。またこの“神の人”の意味内容も、形の上ではエブラ文書またメソポタミアの諸出土文書中の *Ur*, *Lú + DN* あるいは *Iš (mutu) + DN* タイプの人名と比較ができて、旧約マソラ・テキストにおける *'iš (hā)'lôhîm* とは違うものである。⁽⁴⁷⁾

注

- (1) マリ文書は多くの牧羊部族と、その社会経済的なあり様について、画期的展覧を与えた。これらマリ文書の牧羊部族の史料をたんねんに分析した J. Luke, *Pastoralism and Politics in the Mari Period: A Re-Examination of the Character and Political Significance of the Major West Semitic Tribal Groups on the Middle Euphrates, ca. 1828-1758 B.C.*, Ann Arbor, Michigan, 1965; V. H. Matthews, *Pastoral Nomadism in the Mari Kingdom (ca. 1830-1760)*: ASOR Dissertation Series No. 3, Cambridge, 1978, さらに、旧約族長達が同じ社会経済的組織の中で生活した人達であることを主張する V. H. Matthews, “Pastoralists and Patriarchs,” *BA* 44 (1981), 215-218, そしてまた M. Rowton, *JNES* 32 (1973), 201-215; M. Rowton, *Or* 42 (1973), 247 f; M. Rowton, *JNES* 35 (1976), 13 f; M. Rowton, *JNES* 36 (1977), 181-198; S. Gilbert, *JANESCU* 7 (1975), 54-71; M. Rowton, *RAI* 15 (1966), 109-121; J. N. Postgate, *JSS* 20 (1975), 1-21 等をみ

よ。牧羊から定住農耕に進んでいるのではない、という事実をマリ文書は語っているのだが、またエブラ文書ですでに *mar-tu^{ki}* の人の、税金に関して (*šu-du*, TM. 75. G. 546), 短剣について (TM. 76. G. 523, v.1 *gír mar-tu*; TM. 75. G. 1317), 王室より給与を受けている者について (TM. 75. G. 1264, r. IX : 8), 捕虜について (TM. 75. G. 309, r. I : 1-2), *mar-tu^{ki} [en-]* (TM. G. 4256 ; TM. G. 11138 ; TM. 76. G. 521, r. VIII ; TM. 76. G. 524, r. VI, r. II), *mar-tu^{ki}* (TM. 75. G. 1238 ; TM. 75. G. 3129, v. IV : 2), *mar-tum^{ki}* (TM. 75. G. 2490 ; TM. 76. G. 524, r. VIII), *mar-tu mar-tu* (TM. 76. G. 182-184) のことが出ており、アモリ人の特有の神として他にみない *Lim* (M. Heltzer, *Annali* 35, 1975, 291, L : 2) は、エブラでは人名要素としてしばしばみる。例えば *I-ti-ki-li-im* (TM. 75. G. 1318), *Iš-má-li-im* (TM. 75. G. 1336, v. III : 1) 等。したがって G. Buccellati, *The Amorites of the UR III Period*, Naples, 1966, 323-352 でいわれているよりはるか以前より MAR.TU はシュメール社会に居住しており、単純にそこで定住化の過程にあったとは考えにくい。EB IV に古代オリエント世界で文化的変動があったのは、アモリ人牧羊部族の侵入によるものだとする従来の「侵入説」は、ここであらためるべきである。なお、S. Richard, “Toward a Consensus of Opinion of the Early Bronze Age in Palestine-Trasjordan”, *BASOR* 237 (1980), 5-34, esp. 26 ; W. Dever, “New Vistas on the EB IV (“MB I”) Horizon in Syria-Palestine”, *BASOR* 237 (1980), 35-64, esp. 53-58 ; K. A. Kamp, N. Yoffee, “Ethnicity in Ancient Western Asia during the Early Second Millennium B.C.: Archaeological Assessments and Ethnoarchaeological Prospectives”, *BASOR* 237 (1980), 85-104, esp. 98-99。かれらは牧羊部族への先の見解を裏付けている。牧羊部族の移動はなにも「侵入」ではなくて、かれらの定住、居住、牧羊の生活中にあったことで、時間的先後の問題ではない。マリ文書ではある牧羊部族はダマスカスの近辺にまで南下しているし、定期的あるいは牧草地を求めての移動はかなり広範囲で、この移動をくり返し定住地へ帰る。かれらの移動、掠奪また定住農耕、また都市組織機構の中の一員である者も含めて、これらは同じ部族組織中にある者の経済活動であり、生活様態である。かなり都市化の進んでいるエブラ王国も、その王国支配の重要なヒンターランドとして、シリアのみならずパレスチナをも、アモリ人もしくは西セム族の牧羊部族の居住地として、手にしていたと考えられまいかと思う。エブラ文書は多くのスメログラム、シラボグラムを文書中に用いつつ、セム語それも西セム語をその言語としていたのではないかとみえることと合わせ考えると (I. J. Gelb, *SMS* 1/1, 1977, 5-30 ; G. Pettinato, *BA* 39, 1976, 44-52, 94-113) エブラ王国の文化をメソポタミアにのみ限定して分析比較解釈することはできないし、(南メソポタミアとの言語における密接な関係を Gelb, *SMS* 1/1 が明らかにしているばかりでなく、TM. 75. G. 2367 の書簡テーマ、形式がシュメールのものであることを B. Kienast, “Der Feldzugsbericht des ENNADAGĀN in Literarhistorischer Sicht”, *OA* 19, 1980, 247-61 ; G. Pettinato, “Bollettino militare della campagna di Ebla contro la città di Mari”, *OA* 19, 1980, 231-45 が証しているにしても)、シリアあるいはパレスチナとのみ比較してこれを解することも (D. N. Freedman, *BA* 41, 1978, 143-164 ; M. Dahood, *VTS* 29, 1978, 81-112 ; M. Dahood, *UF* 11, 1979, 141-146 等), 事実として一面的であり、文書の解釈を誤ることになる

- (R. Biggs, *BA* 43, 1980, 76–87 ; A. Archi, *Biblica* 60, 1979, 556–566 ; A. Archi, *BA* 44, 1981, 145–154 等の批判参照)。
- (2) R. Harris, “On Foreigners in Old Babylonian Sippar”, *RA* 70 (1976), 152.
- (3) アブウ・ツァラービーク文書(前2600年)には, *En-na-il* というセム語名が見出される(AbS T 192, 274, 282, 344 ; Biggs, *Or* 36, 61)。これはエブラ文書(TM. 75. G. 1336, [r. VIII : 10 ; TM. 75. G. 1292, r. IV : 7', passim.), 及び古アッカドのテキスト(*MAD* 3, 28)中の *En-na-il* と比べることができるもので, エブラ文書ではまた(TM. 75. G. 1261, r. X : 7–8), *gub-lu^{ki}* (ビュブロス)の人の *En-na-ia* (*ia* が愛称語尾とする主張について, 拙論『オリエント』vol. 23, No. 2, 21–60 及び Archi, *BA* 44, 1981, 145–146 参照)とあり, これ等をみると, エブラ王国時代には(前25–24世紀), 既にメソポタミア, シリア東地中海岸に亘って, 同じセム語人名が広く分布していることをみる。
- (4) J. Holstein, “The Case of 'iš hā'elōhīm Reconsidered: Philological Analysis Versus Historical Reconstruction”, *HUCA* 48 (1977), 69–81 ; R. Hallevy, “Man of God”, *JNES* 17 (1958), 239 f ; A. Rofo, “The Classification of the Prophetic Stories”, *JBL* 89 (1970), 431 f ; H. M. Orlinsky, “The Seer-Priest and the Prophet in Ancient Israel”, *Essays in Biblical Culture and Bible Translation*, New York, 1974, 39–43 等。
- (5) ヘブライ語 *'iš* が個の存在としての“人”を意味することについて E. A. Speiser, *Genesis: The Anchor Bible*, New York, 1964, 30, n. 1.
- (6) R. R. Stieglitz, “The Hebrew Names of the Seven Planets”, *JNES* 40 (1981), 137 参照。
- (7) M. Noth *Die Israelitischen Personennamen in Rahmen der Gemeinsemitischen Namengebung*, Reprint, Hildesheim, 1980, 138–139.
- (8) 例えば E. Lipiński, “šyhw and 'šb'el and Parallel Personal Names”, *OLP* 5 (1974), 8.
- (9) Dahood, *VTS* 29, 91 ; Lipiński, *OLP* 5, 6.
- (10) W. F. Albright, *Archaeology and the Religion of Israel*, 3rd ed. Baltimore, 1953, 113 and 207, n. 62 ; E. Lipiński, “Peninna, Iti'el et l'Athète” *VT* 17 (1967), 68–75.
- (11) A. T. Clay, *Personal Names from Cuneiform Inscriptions of the Cassite Period*, New Haven, 1912, 83 ; H. P. Müller, “Religionsgeschichtliche Beobachtungen zu den Texten von Ebla”, *ZDPV* 96 (1980), 4 及び H. P. Müller, “Gab es in Ebla einen Gottesnamen Ja?”, *ZA* 70 (1981), 70–92, esp. 81, n. 59, 88 はオルブライトと同じ解釈を, エブラ文書中の *Iš* + *DN* の形の人名に対して行っている。
- (12) M. Dahood, *Ugaritic-Hebrew Philology*, Rome, 1965, 16.
- (13) *I-ši-lum* = *Iš-ilum*, *I-ti-lum* = *I-ti-ilum* (Šibadar の人, TM. 75. G. 1345, r. II : 6), *ib-ni-ni-lí* = *lbni-ili* (AO 7754, r. II : 7')。
- (14) Damu については TM. 75. G. 1343, r. VII : 3。
- (15) エブラ及びアモリ人人名における *-ia* が愛称, 略語々尾であることについて注(3)。

- 及び P. Fronzaroli, “The Concord in Gender in Eblaite Theophoric Personal Names”, *UF* 11 (1979), 275-281 の見解参照。
- (16) *I-ti-ma-il* (TM. 75. G. 1274, r. XI : 5) をみよ。Genitive compound name における *-ma-* と *-la-* について H. B. Huffmon, *Amorite Personal Names in the Mari Texts*, 1965, 118 f and 223 ; *MAD* 5, 165-166 で古アッカド人名における *-ma-*。エブラにおける *-la-* については, *I-gi-i-lum* (AbS T 107), *I-gi* (TM. 75. G. 1237 ; TM. 75. G. 1314 ; TM. 75. G. 1686), *I-gi-la-ia* (TM. 75. G. 1360, r. II : 7), *I-gi-Da-mu* (TM. 75. G. 1338, v. VII : 3) 等を比較してみるとよい。
- (17) G. Pettinato, *Ebla: Unimpero inciso nell'argilla*, 1979, Milano, 281 ; *Išhara Zi-da-ra*^{ki} (TM. 75. G. 2075, r. VI : 18-21), *Išhara má-NE* (TM. 75. G. 2075, r. VIII), *Išhara Zi-da-la* (TM. 75. G. 2238, r. VIII : 7-8), *Išhara Zu-ra-mu*^{ki} (TM. 75. G. 2238, r. X : 8-9) ; G. Pettinato, *OA* 18 (1979), 105 等参照。
- (18) E. Laroche, *Revue Hittite et Asiatique*, Tome 7-Fasc. 46, 1975, Amsterdam, 51 ; E. Laroche, *Glossaire de la Langue Hourrite: Revue Hittite et Asiatique*, Tome 34, 1978, Paris, 126. また S. Rummel (ed.), *Ras Shamra Parallels: Analecta Orientalia* 51, Roma, 1981, Vol. III, 481, V 10 参照。
- (19) M. Astour, “Some Recent Works on Ancient Syria and the Sea People”, *JAOS* 92 (1972), 447-450 で彼は, 北シリア, メソポタミアにおける地名のうち, 語尾がフルリ語の形を有するものでも, その語幹は多くのセム語の性格を持つものであることも示している。
- (20) ウガリトのパンテオンには *Išhara* の座があるが, ウガリト文書中のアルファベット綴りのフルリ語祭儀テキストに (*KTU* 1.131, RS 24.285), 「香がのぼった, おお *Išhara* よ」(Laroche) ではじまる言葉がある。このテキストには, マリ, エマル, その他アララクの前18世紀出土文書中の地名で, シリア, メソポタミアにおけるものを正確に挙げているのをみる。そうだからといって, この女神がフルリ語であり, フルリ人の神であるとはいえない (なお, 歴代志上 2 : 24, 4 : 5 の人名 *'šhr* 参照)。
- (21) エブラの言語については, Gelb, *op. cit.*, SMS 1/1 及び G. Garbibi, “Pensieri su Ebla (ovvero: Le uova di Babilonia)”, *Annali* 38 (1978), 41-52 ; E. Affuso, “I pronomi di I e II persona in semitico, eziziano e berbero”, *Annali* 37 (1977), 249-282 を参照。
- (22) W. Heimpel, “Sumerische und akkadische Personennamen”, *AfO* 25 (1977), 171-174 参照。lú.^aba-ba₆ “Mann der Baba” im Dativ lú.^aba-ba₆ (*TCL* I, 90 : 1) について P. O. Edzard, “Zur Namengebung der Neusumerischen Zeit”, *BiOr* 28 (1971), 165 a. なお, 古バビロン人名について Y. Kobayashi, *Acta Sumerologica* 2 (1980), 76 は “Man of DN” の人名タイプにふれている。
- (23) lú, ur=*a-mi(e)-lu=a-wi-lu* について, *AHw* 90 f, *CAD* A/2, 48 f.
- (24) *a-wi-lum ša Ištar* (*VAS* 16, 144 : 8) との違いがあるのかどうかは分らない (*CAD* A/2, 51 b 参照)。また lú urí, lú umma.ki (4 H-T 1, r. XIII' : 3', 4', V. Crauford, *JCS* 29, 197 等) 参照。
- (25) 但し, *DINGIR abi u Ištar ummi* (*AfO* 14, 142 : 37) は “わが父としての神とわが母としてのイシュタル”。
- (26) *ARM* X の諸テキスト及び H. B. Huffmon, “Prophecy in the Mari Letters”,

- BA 31 (1968), 101-124 参照。
- (27) そしてまた, $\dot{a}\dot{u}\text{-}da\ l\dot{u}\ \dot{h}a\text{-}lam^{ki}$ (TM. 75. G. 1360, r. XII : 21-22) における $l\dot{u}$ は、直接には神 Ada を指しているが、これは $\dot{H}alam$ に“属する者”の意で、通常は $\dot{a}\text{-}da\ (\dot{s}a)\ \dot{h}a\text{-}lam^{ki}$ と表わすものである (CAD A/2, 51 b)。
- (28) I. J. Gelb, *Computer Aided Analysis of Amorite: Assyriological Studies*, No. 21, Chicago, 1980, 158, 625, 4770 f を参照。
- (29) ハンムラピ法典では *terhatum* を女の父へ与えた男が、女をその家へ入れると「夫」の意味で *mutu* と呼ばれている (1 : 1, 137 : 12-13, 158 : 16, 72 : 39, 40)。あるいは、離婚成立の時の宣言文で (4 : 6-11) 用いられている。またドライバーによると、元来はこの言葉は「男性戦士」の意 (G. R. Driver, *The Babylonian Laws*, Vol. I Oxford, 1960, 263)。さらに、Mutu + DN の形の人名が、Genitive Compound type ではないことを示す明確な例はない (APNMT, 120 参照)。
- (30) “s”にはエジプト語では「夫」の意味はない。中王国では、「夫」には通常“hi”を用いることがはっきりしている。O. Faulkner, *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, 1976, Oxford, 157 ; H. Grapow, *Ägyptisches Handwörterbuch*, 1961, Hildesheim, 100 参照。
- (31) K. Sethe, *Die Achtung feindlicher Fürsten, Völker und Dinge auf alt-ägyptischen Tongefäßsschreiben des mittleren Reiches*, Berlin, 1926 ; W. F. Albright, “Northwest-semitic Names in a List of Egyptian Slaves from the Eighteenth Century B. C.”, *JAOS* 74 (1954), 222-233 等。
- (32) M. Dietrich, “Mann des Totengeistes”, *UF* 8 (1976), 51 ; A. Jirku, “Rapa’u”, *ZAW* 77 (1967), 82 f ; M. Dijkstra, “Problematical Passages in the Legend of Aqhātu”, *UF* 7 (1972), 172 ; W. J. Horwitz, “The Significance of the Rephaim” *JNWSL* 7 (1979, ersch. 1980), 37-43.
- (33) *KTU* 1.39 : 22 ; 1.41 : 5, 6, 27, 40 ; 1.87 : 5-6, 29, 44 ; 1.90 : 7, 8 ; 1.105 : 12 ; 1.106 : 2, 7, 8 ; 1.112 : 5, 6 ; 123 : 31 ; 1.132 : 21, 24 ; 1.134 : 3. *inš* について *UT* 19.269 ; J. Aistleitner, *WUS* 28 及び B. M. Wagner, *BZAW* 96 (1966), 26 f, Nr. 19-20 “Mensch” 参照。
- (34) J. C. de Moor, *AOAT* 16, 1971, 132 は “the most gentle of the gods”, *inš* は神々の称号と解す。ウガリト文書では *iš* に当たるものは *bnš*, *nšm* (pl.) であることを *Ugar. V*, 2 : 20, 46 でみよ。*Ugar. VII*, 26 f, RS 24.250 : 2 の *inš ilm* は称号のようだ。しかし、RS 24.256 : 5 にみるものは、称号ではない固有名詞のようである。
- (35) Išī- における -i については、F. Gröndahl, *Die Personennamen der Texte aus Ugarit*, Roma, 1967, 31。しかし、ここでは1人称の所有代名詞ではないだろう。アマルナ書簡にみるカナアンの人名には、次のタイプのもの (-i) が多い、即ち, *Addi-Addi* (EA 120 : 31), *Addi-A-ši-ir-ta* (EA 60 : 2, 61 : 2), *Ab-di-^aIš-^aha-ra* (AT 270 : 20, 204 : 4), *Abdi-Milki* (EA 123 : 37 は LUGAL だが, EA 146 : 2 の A-bi-mil-ki の如くに -milki と読んだらう) 等、そして、古バビロン時代のリマ・タブレットの人名 *Ab-di-^aIštar* (TR 177 : 3, 201 : 2) は, *Ab-du-Ištar* (TR 322 : I : 30) と同一人物であることが確認される。前5世紀ニブールのムラシュー家文書の *Ab-di-^aMil-ki* (UM 22819) を含めて、Genitive Compound name にお

- ける *-i* は人名第一，第二要素のもの両者とも，所有代名詞ではないことが明らかである。また，*iši* そのものは *našu* の命令形ともとれるが (F. M. Fales, *Iraq* 41, 1979, 55)，これはとらない。*iš* をじっさいには *iši* と発音したものであろう。
- (36) 神 *Mana* については，サルゴン時代人名 *Šu-Ma-na* (*HSS* X, 155 : ii : 12)，また古巴ビロン時代には月名として (*ARMT* VII, 7 ; *AHW* 601 ; J. J. M. Roberts, *The Earliest Semitic Pantheon*, Baltimore and London, 1972, 45, 57)。
- (37) G. Contenau, *Contrats néo-babyloniens*, I (*TCL* XII), Paris, 1927, No. 114 : 12 ; E. W. Moore, *Neo-Babylonian Business and Administrative Documents*, Ann Arbor, 1935, 110, 111, No. 114 : 12.
- (38) R. Zadok, *On West Semites in Babylonia during the Chaldean and Achaemenian Periods: An Onomastic Study*, Jerusalem, 1977, 357-358. この *Iši-^aKUR.GAL* に対比すべきヘブライ人名は *'iš'ur* (L. Delaporte, *Épigraphes araméens*, Paris, 1912, Nos. 48-50)。さらに *'amrāphel* (創世記 14 : 1, 9) = ^d*Amurru* + *apālu* (W. F. Albright, *BASOR* 163, 1943, 49, 67) の可能性。W. Baumgartner, *op. cit.*, 66 a 参照。
- (39) *KAI* 143 : 3 の *'yš* は “夫”，*KAI* 181 : 25 の *'š* は “jeder”。これについて *KAI* Bd. III, 27 f index をみよ。クムラン文書のアラム語は A. M. Hebermann, *Mgylwt Mδbr Yhudh*, Jerusalem, 1959, Qumfurdnšyh, 8 f ; J. A. Fitzmyer and D. S. Marington, *A Manual of Palestine Aramaic Texts*, Rome 1978, 309 index. 聖書について F. Rosenthal, *A Grammar of Biblical Aramaic*, Wiesbaden, 1961, 77 *'enāš*, index 22, 42, 181 ; J. P. Y. van der Ploeg and others, *Le Targum de Job*, Leiden, 1971, 89 また J. Hoftijzer and G. van der Kooij, *Aramaic Texts from Deir ʿAlla*, Leiden, 1976, I : 1, II : 8, man, mankind 等参照。
- (40) アラム語には，*'iš<'išš<'inš*, pl. *inš* があり，これは，プロト・北西セム語の *inš* からきていると主張する S. A. Kaufman, *The Akkadian Influence on Aramaic: Assyriological Studies* 19, Chicago, 1974, , 78, n. 243 は，これがアッカド語の *našu* とは別のものであることを証しているが，これを参照。
- (41) これらに古アッシリアの人名 *En-na-Sinⁱⁿ* (W. Gwaltney, “Indices of Proper Names from the EL Old Assyrian Texts”, *HUCA* 48, 1971, 35 a) を加える。また，新アッシリアの人名 *Ḫa-am-nu-nu* (*ABL* 231 : 3) もこれと同タイプと考える (R. Zadok, *WO* 9/1, 1977, 43, *nn>mn* of *Ḫanūnu>Ḫa-na-na=Ḫannāh*. *ABL* 287 : 4 参照)。
- (42) J. A. Fitzmyer, *The Aramaic Inscriptions of Sefire*, Rome, 1967. ただし，アラム語では *Ištar* は ^a*Iš-šár-e-a*, ^a*ŠÁR-da-a-nu* (Zadok, *op. cit.*, 35-36) の如く，*Iššar* また *ŠÁR* で表わす。
- (43) E. Lipiński, *Studies in Aramaic Inscriptions and Onomastics: Orientalia Lovaniensia Analecta* I, Leuven, 1975, 151-152 及び Lipiński, *OLZ*, *op. cit.*, 11 ; Lipiński, *VT* 23 (1973), 369, n. 2。
- (44) なお Punic の人名 *'šb'l* (*CIS* 4917 : 6/7), *'š'l* (F. L. Benzen, *Personal Names in the Phoenician and Punic Inscriptions*, Rome, 1972, 70), *yšb'l* (*CIS* I, 159 : 3), パルミラの人名 *'yš'* (J. K. Stark, *Personal Names in Palmyrene*

Inscriptions, Oxford, 1971, 676, *iš*+hypocoristicon -'), サマリヤ・オストラカの 'š'='š+'(Noth, *IPN*, No. 229) 等, いずれも 'š, 'yš を *iš* と解することができる。

- (45) 創世紀 4:1 の 'iš *Yhwh* (L. Koehler, *Lexicon in Veteris Testamenti Libros*, Leiden, 1953, 41 b) 参照。なお, 先のエジプトの中, 新王国時代の s-n-DN タイプの人名は, アラドとシナイが EB II の時代から密接な交渉の下にあったこと等を見れば, 孤立して出現した人名とは思えない (Cf. P. Peper, "The Interrelationship between Arad and Sites in Southern Sinai in the EB II", *IEJ* 23, 1973, 193-97; W. H. Shea, "Artistic Balance among the Beni Hasan Asiatics", *BA* 44, 1981, 219-228.)。
- (46) L. G. Herr, *The Scripts of Ancient Northwest Semitic Seals*, Missoula, 1978, Nos. 5, 6, 7, 19, 100.
- (47) ちなみに, フェニキア語の *rb kḥnm 'lm nrgl* (J. Friedrich- W. Röllig, *Phönizische-Punische Grammatik: Analecta Orientalia* 46, Roma, 1970, 306, I では "Hoher Priester des Gottes Nergal" と訳す) は, マソラ・テキスト中の預言者 "神の人" というのと違って, 神殿所属の聖職者そのものを表わしている。なお, '*lm* が複数形だが単数の意味であることは, *KAI* 26: A: I: 8, II: 11; *KAI* 65: 11 及び *KAI* Bd. I, 15, 40 また Friedrich, *ibid.*, 240 をみよ。 (1982. 2 脱稿)